

99年3月6日10時10分。堀合と私は猛烈な風の乗鞍岳(3026m)頂上に立っていた。

早朝、標高約1600mの国民休暇村駐車場を出発したのが4:45。標高約2800mの肩の小屋に着いたのが8:40。雪山の標高差1200mを4時間は速い。ここはいつもどうしてこうなのだろう。天気は快晴なのだが猛烈な風が吹きまくる。ガチガチの氷の上をシール歩行していくと風で押し戻されるくらいだ。

スキー靴にアイゼンをつけピッケルを握り頂上に向かう。この山は肩から標高差200mがポイントだ。朝日岳(2975m)を越えると蚕玉岳(こだま)の向こうに頂上をかたちづくる純白の城砦が見えた。頂上直下の風は特に凄かった。風上にスキージャンパーのように体を傾けないとバランスが取れない。

頂上の展望は素晴らしかった。槍、穂高、剣、白山、御岳、南アの山々……。下山は肩からのんびり遊びながら滑降しても1:30で終了。13時には露天風呂に入り乗鞍岳を仰ぎながらビールを飲んでいた。やはりスキー登山は「速い」のだ。

ここ3年位麗峰はスキー登山が盛んになり、随分仲間が増えた。スキー登山の魅力はまず速い(快適な機動性)、楽しい(あの爽快感は何んだ)、美しい(うまいスキーは芸術的で惚れ惚れする)、そして難しい(奥が深く簡単に成就しない)である。

山スキーはかなり以前から取り組んでいた。初めてのツアーは76年3月25~28日に行った尾瀬だった。当時はまだまだ用具はひどく、スキーはやたら重く、シールは縛る方式、靴は革のヘンケの登山靴、ビンディングはジルブレッタのセフティのないワイヤー式だった。

これではロクなスキーは望めないと思うが、山日記には「重荷だったがマアマアだった」と記述がある。その頃はまだ今みたいに「バックカントリー」なんて格好いい言葉は存在しなかったが、あの喧騒としたケバケバしいゲレンデスキーだけは端からやる気はなかった。

日本の山スキールートは無限である。スキー期間は短く12月から5月初旬だから始めたら生涯の追求になる。ただ、雪が少ない本県ではなかなか思うように滑れないのが悩みだが、唯一我々には「富士山二ツ塚」という切り札がある。

先日は14時に人間ドックを済ませ14時50分2合目発。17時まで二ツ塚で2本滑った。1本終えて再び上塚に登ったのが16時15分。見上げた暮れなずむ富士山上空にはウロコ雲が広がり、それは感動的で美しかった。

まあ、その気になれば二ツ塚は午後からでも十分楽しめ、トレーニングが出来る貴重な「ゲレンデ」である。

会は今まで巻機山、平標山、剣沢、雷鳥沢、御山谷、雨飾山、乗鞍岳、富士山、八方尾根、谷川岳などで山スキーを楽しんで来た。とにかく毎年この時期になると、どこに行くか、どこをどう滑るかで頭が一杯になる。

夢は今度は山スキーで海外に行きたい。そして会で山スキーを持ってる全員で揃ってシュプールを刻むことである。